

村田正雄『空飛ぶ円盤と超科学』（白光真宏会出版局、1974年）

著者の村田正雄先生は、コロナ電機工業社長、宗教法人・白光真宏会の理事であられた。白光真宏会の中では、既に『私の霊界通信』シリーズの御著書を通して、その特異な霊能力はよく知られており、「世界平和の祈り」を行なう本部主催の統一会や地方の祈りの集会などの講師として八面六臂の活躍をされていた。首をちょっと横に振るだけで（？）直ちに体外（幽体）離脱ができ、霊界や他の星へ行って来ることができる特殊能力の持ち主であったから、他宗教の教祖への誘いも多かったに違いないが、それらを全て断り、御本人はどこまでも五井昌久先生の高弟の一人であり続けた。その風貌は、どこか田舎の純朴なおじさんといった印象で、やや囁かれた声で懇切丁寧に訥々とした口調でのご指導であった。偉ぶるところは微塵もなく、他人に接する態度は徹底して謙虚であられた。本書出版後にマスコミからの取材も数多あったと伺うが、興味本位で記した事柄ではないため、すべて断ったとのことである。

本書の概要については、必ずしも出来事の順に内容を紹介することはせずに、書かれた事柄の本質が浮彫りになるよう努めてみたい。それゆえ、以下の記述は、概要の紹介に個人的な説明と解釈が入り交じったものであることを、予めお断りしておきたい。本書のポイントは、以下のものであろう。即ち、進化した宇宙人の生き方や文明の有り様を明らかにすることによって、私たち地球人が置かれた現状を宇宙的な観点から正確に把握するとともに、地球人が今後進むべき新たな生き方や文明の方向性を指し示すことであると言えるだろう。つまり、(1)地球人の現状把握、(2)進化した宇宙人の生き方、(3)地球人が今後取るべき生き方、この三点がポイントと見られる。これを「宗教（霊性）と科学の関係」という観点から言い直すならば、(1)霊性を見失った近現代の物質科学を、(2)より進化した宇宙人の超科学を知らせることによって、より包括的な視座へと導いて、(3)宇宙意識への覚醒と、霊性と科学が一つに収斂する宇宙時代への方向転換を誘う、ということになるのではないか。それゆえ、「宇宙人」と「超科学」が、本書解読のキーワードとなる。

本書出版時（1974年。実際に書かれたのは、その十数年前）よりも、現代（2020年）の方が、時代の閉塞感は遥かに強く、また地球規模で（少なくとも先進諸国では）蔓延しているように見える。空飛ぶ円盤と言えば、1950年代から1960年代にかけて、ジョージ・アダムスキーの著作『空飛ぶ円盤同乗記』等が和訳・出版されて、一部の好事家の間で関心が高まっていた。アダムスキーによる金星人との会見は、肉体を纏った状態でよりも、むしろ幽体離脱の状態での体験と推察されるが、村田先生の超常体験も、肉体ではなく「霊体で経験したこと」とされている。さて、その「宇宙人」と「超科学」であるが、日常生活の慣性系と現代文明の既成の認識枠組の中に安住している限り、宇宙人も超科学もありえず、そのような存在を想定すること自体が荒唐無稽であり、笑止千万ということになる。既成の固定概念にすっかり絡め捕られているのであるから、その自縄自縛から抜け出すには、右橋を叩いて渡る用心深さよりも、右頭を叩いて割る果敢さが必要かもしれない。

従って、最初から本書を敬遠している人たちに改めてその意義の一端を知っていただくために、ここで想像を逞しゅうすることをお勧めしたい。

まずは、普段さほど注意することのない夜空を見上げてみよう。そこには満天の星が煌めいている。今ごろは一年の内で最も星空が華やかな時期で、宵の明星（金星）があり、北には北斗七星、南にはオリオン座やシリウスが見える。私たちの住む地球は太陽系の中に位置して自転（周期は1日）と公転（周期は1年）を繰り返しているが、太陽系の中には8個の惑星と5個の準惑星があり、この太陽系自体は、直径10万光年（94京6千兆km、途方もなく長くてピンと来ない）ほどの天の川銀河の片隅に置かれている。宇宙全体では天の川銀河のような銀河が二兆ほど存在すると推測されている。それら一つひとつの銀河に地球のように知的生命体が住む星が一つしかないと仮定してみても、知的生命体、要するに宇宙人が住む星は二兆も存在することになる。それは最低限に見積もっての数字にすぎず、天の川銀河には2000億から4000億の惑星があると推定されているから、実際は天文学的な数の星々に宇宙人が住んでいると推察される。想像するだけでも、目も眩むような話ではないか。この時点で想像の翼を広げて天空へ飛翔できるか否かが、認識の分岐点となる。まだまだ大部分の地球人は、それでもこの地球のほんの一角にしか眼を向けずに、日々の生活を慌ただしく送っている。地球が一つの惑星であるという「地球意識」は、IT革命などのお蔭で獲得されつつあるが、この地球が宇宙の中の一つの惑星であるという「宇宙意識」は、残念ながらまだ未開発である。その限りで、地球は「宇宙の孤児」と言ってよい。現実には有形無形の援助や指導を受けていながら、その事実を知らずに、孤立無援の「孤児」だと思い込んでいる。意識が地球内に引き籠もり状態なのである。満天に星々が煌めく中、この惑星だけに人類のような知的生命体が住む奇跡や偶然が起きたなどと、果たして正気で思えるだろうか。「井の中の蛙 大海を知らず」という諺があるが、「井の中の蛙 大海を知らず」という事態を知っているものの視座があるからこそ、その諺は生まれた。それとよく似たことが、本書の視座から描かれているのではないかと思うのである。

本書に繰り返し述べられているように、著者は統一（一種の瞑想）中にしばしば（地球の）霊界や（地球外の）惑星への往来を経験する。瞬時に肉体から離脱し、「白黄色に輝く大空間を一点となった私が流星のごとく飛ぶ」というような表現が、随所に出てくる。ここでは、体外離脱の真偽を問うことには関わらない。世の中には日々経験しているながら、その真相が皆目分かっていないことが山ほどある。その一例が「眠り」である。日々、目覚めては眠り、眠っては目覚める。この眠りと目覚めのリズムの中で、たぶん私たちは一種の「死と再生」を反復しているのであるが、眠りが擬死的な幽体離脱であることを明瞭に認知している人は、少ないのではないか。

さて、著者は、昭和34年6月9日に聖ヶ丘（本部道場）で深い統一中に体外離脱し、旧知の間柄に思えるM氏らの宇宙人に迎えられて、中型機の円盤に乗る。そこで、円盤の飛行原理やその詳細な内部構造、あるいは大宇宙の根源から発せられる宇宙波や、宇宙万物

の生成原理、星々の天位、そして進化した宇宙人の生き方などについて教えられる。それらは、現在の地球科学の常識や地球人の生き方とは根本的に異なるものであるから、説明を受けても、いつのまにか地球科学や地球人の馴染んだ見方に陥っていることに気づかされて、著者は何度も赤面し、その度に心から恥じ入って反省することを繰り返す。宇宙人の方も、そうなることは先刻承知なので、噛んで含めるように丁寧に教えてくれる。その内容とは、一体どのようなものだろうか。超科学によって製作された円盤の構造と機能の大要は、以下のようなことであった。なお、宇宙人が語る言葉は、以心伝心的にすーっと分かるので、宇宙語や日本語という分類が意味を持たない。「波動で意思がそのまま完全に、お互いに相通ずる」、つまりテレパシーでの会話が成り立っているのである。

M 氏「無限に広い宇宙は、一つなる力のもとに規則正しく動いているのです。一つの中心なる力がいろいろと変化して、この広大無辺の大宇宙を形成しているのです。この宇宙に散在する幾億とも知れぬ星の一つとして、この力の及ばぬものはありません。その力は、この宇宙空間を縦横無尽に動きまわります。この力を法則と表現することもあります。広大にして無限に広い大宇宙は、一なる神のもとに動いているのであります。この大神様の力が円盤に働きかける時、自由自在に動くことができますのであります。」(p.28)

M 氏「大宇宙の根源より発せる宇宙波（磁波）を捕える、強力な磁石のような物質がありまして、凸レンズのように突き出た十字の枠に受波され、磁気の外側を通して、天井に突き抜けている誘導柱の内部を通じて、操縦椅子から操縦者の脳中心を通ります。」(p.30) 円盤の中心は操縦者（機長）であり、「宇宙波を受波した受波器は、そのまま機長（操縦者）に伝わり、機長の体内を、精体を通じて、その心臓部へ、機長の心霊波を通じて操縦桿に伝達致します。」(p.31) 操縦桿の下部がジャイロコンパスに連結しており、その宇宙波が増幅器へ送られる。「このジャイロコンパスの回転理論は、磁場と電流回路との相互作用を応用して、電気的エネルギーを機械的エネルギーに変化するモーターの回転理論と同じ」(p.33) であって、「機長よりきた光波が、伝導軸を通じてコンパスの中心に入ります。ジャイロコンパスの上下の端には強力な磁極がありまして、両方共マイナスであります。お互いに遠ざかろうとする力が働きますが、コンパスの回転によって起こる遠心力が加わって、平衡を保っております。」(p.34) 「ジャイロコンパスの軸を中心に、十字になった帯の末端には七・五糶の丸い水晶球のようなものがあります。ものすごく敏感な水晶球の働きはコンパスの回転に、水平、上昇、下降、斜行など自由自在の働きを円盤に起こさせるのであります。」(p.35)

M 氏「宇宙波は機長を通じて、光波と変わります。光波は機長の心波と同じ速さに変わります。機長の心波こそ、円盤を操縦する原動波なのであります。そして再生器を通じて微光波となります。微光波は強力な電磁器を通して電磁波となります。そうして電磁波には相反する彎曲（歪）が与えられて、そうして円盤の約三倍から五倍の周囲に最も強く働いて、つねに円盤を保護しているのです。」(p.34) 円盤の大きさは、小は直径 30 メートルぐ

らいから大は直径数キロメートルにわたる膨大なものまであるらしい。

空飛ぶ円盤は、いわば「超科学」の粋を集めた文明の利器である。精神文明と物質文明との分裂が一つに統合されたものを靈性文明と呼ぶならば、「超科学」は同時に「超宗教」でもあって、両者は不可分な仕方で融合している。円盤は、超科学の生きた乗物として単なる物体を超えたもの、誤解を恐れずに言えば、機長を含む乗組員（30名ほど）の第二の身体とも表現できるものである。その意味では、円盤に乗るといふ言い方は正しくなく、むしろ円盤と一つに融合するのである。その際に重要なのは、機長や乗組員の心的波動に同調することである。そこでは、「主体（心身）と客体（物体）」の間に作用と反作用の拮抗が生じるような主客関係がもはや通用せず、「主体（心身）と第二の身体」の間に波動の宥和や調律が実現されるような主客関係へと昇華するのである。

円盤の飛行原理について再度確認しておく、大宇宙の根源から発せられる宇宙波を円盤の天井部で受信し、それが誘導柱の内部を通過して操縦椅子の機長に届き、機長の心霊波を通じて操縦桿に伝わる。宇宙波は機長を通して光波に変わり、その光波は機長の心波と同じ速さとなって、さらに再生器を通過して微光波に変わり、微光波は電磁器を通過して電磁波となり、相反する彎曲が与えられる仕方で円盤の周囲に強力に放射されて円盤を保護するのである。空飛ぶ円盤の断面図は本書の p.39 に、また円盤母船の設計図は p.236 に掲載されている。要するに、大宇宙の根源から発せられる宇宙波が、円盤の真の原動力なのである。では、その宇宙波の根源には、一体何があるのか。

「宇宙の中心」については、次のように語られている。「大宇宙は人間の肉体の構造に似ています。人間の肉体は約四兆（※現在では三七兆、もしくは六〇兆と推定）の細胞からなっていると、地球の科学者もいっています。無数の個が集まってそれぞれが複雑な相関関係を密接に保ちながら、一つの機能をはたしてゆく。そしてその機能は全体の一部として不可欠の存在となっている。宇宙に散在する星は、この細胞のようなものであります。それで人間のことを小宇宙といっているのは真理であります。大宇宙が人間の真体、つまり神体であることを宇宙人たちはよく知っております。」(p.56) 宇宙は中心へ中心へと向かうほど明るくなり、宇宙の大中心は「輝ける白光の真空」である。その中心となる真空は、「無の世界とは全く対照的な、一切のものが実在する世界」であり、「波動の根源としての絶対の心です。絶対の心こそ真空であり、白光と輝くのです。それが大神様であります。」(p.58)

宇宙の中心としての絶対心が、そのまま大神様であるということは、絶対心＝絶対神であり、宇宙心＝宇宙神であるということである。こうした表現が、宗教（靈性）と科学が一つに収斂した存在境位では、何の抵抗もなく使われている。このことに違和感があるとすれば、靈性と科学が分断された世界にそれほどまでに過剰に適応してしまったということに他ならない。

ところで、この円盤の機長は、美しい日本人女性のものである。以下、機長の言葉を幾つか引用しておこう。

機長「この大宇宙に散在する幾千億とも知れない星々の大部分には、いずれも人類が住んでいますが、進化の道程に従って、その生活内容が異なるのです。」(p.69) 長い間、宇宙の孤児（星々との交信や交通が出来ない状態）として取り残されてきた地球人類だが、地球や太陽系や他の星々を司る親太陽が他の親太陽に移り変わることに応じて、つまり祭祀星が交代することに応じて、大宇宙の人類の仲間入りをすることになるようである。

機長「宇宙の進歩した星々の科学の片鱗を知らされる時、初めて地球科学のおくれと、根本的な概念となっていた論証法は、末梢的事物にとらわれていたということがわかってまいります。大宇宙の神秘として厚い扉の内側に閉ざされていた大宇宙科学が、次第に地球の科学者の手でもわかってまいります。科学者たちが見出したように見えますが、実は宇宙人たちが、そうした天命をおびた人々の心の内に働いて指導してゆくのです。」(p.72) 地球人類の平和を祈る人々が次第に多くなると、地球人類に一大昇華が見られて、素晴らしい「黄金時代」に入るとされる。宇宙科学が展開される時、「政治も宗教も科学も芸術も一つになって」一大光明の中に溶け込んでゆく。

具体的な生活形態や社会システムなどは、どのように変わるのだろうか。「地球上に進歩した星の社会制度や新しい社会通念による社会機構が生まれ、取りわけ、科学の進歩は衣食住のために費やす時間を十分の一に短縮し、残された大部分の時間は、人々の知識経験を深めるため、また創造されるためのものに使われるようになります。それと人間の死は、旅行や引越しをするようなもので、旅行や引越ししたからといって、その人間の本質になんら変わる処がないということが、本当に多くの人に理解されましょう。」(p.75) 死別や別離の悲しみは、過去のものとなる。貨幣（お金）は存在しない。（※FRB〔連邦準備制度理事会〕や日銀を背後で操っている、つまり通貨発行権を独占している闇の民間組織など、過去の遺物となる。）必要なものは、必要なときに、必要な分だけ与えられるのである。宇宙人たちの食事は、愛念の交歓であり、神様への感謝の喜びが溢れている。肉食はせず、穀物や果物や野菜等が主で、電磁波によって波動を変えること（波動分離の方法）で食材の組織の内容に変化を与えるのが料理の基本となる。気候は温暖な地方の四季と同じようで、冬でも三寒四温を繰り返しており、当然のことながら自然の猛威はない。それは「自己の本質を忘却したところから生じた業想念の累積が自然に崩れる現象」であるから、台風や地震などの自然災害とも無縁である。病気や不幸に関しては、成長や進化の段階として、よく似たことは起きるが、悲しさ苦しき等のような響きを醸しだすものはない。

.....

昭和 34 年 9 月上旬の聖ヶ丘で、著者は以前と同じ中型機の円盤に同乗する。この当時、「超科学」や「宇宙科学」と言われているものは、数年後には「宇宙子波動生命物理学」、略して「宇宙子科学」と呼ばれるようになる。円盤や宇宙人を受け入れる根本条件は、何

よりも地球人類の想念波動を変えることである。波動の浄化、想念の昇華が不可欠であり、そのためには世界平和の祈りが重要となる。つまり、円盤や宇宙人たちの住む世界の波動に同調・同期することが求められるわけである。また、星の持つ天命、つまり天体上の位置軌道が決まっていること、水星や金星の住宅は丸い円筒のような建物が多く、窓がないのは、その星の生活様式が反映されるからであることなどが教示される。

「大宇宙の根源、つまり大神様より絶えず発せられている波動は、大きく分けて七つに変化を致します。七は完成を表現して、七つの変化が完全に調和された時、またもとの一つにかえります。今地球上では五つの波動の変化が基本となっていてできております。……六つ目の波動の変化こそ、実に微妙な精妙な波動であって、これが現在迄の五つの波動の中に等しく調和された時こそ、初めて七つ目の波動の変化が起こります。」(p.114) 七は完成の数を象徴しており、一なる源へ帰ることになるが、それは虚無的な永劫回帰というよりも、進化が螺旋運動をなしつつ一なる中心へと帰る動態である。

「波動つまり光には根本的に二つの異なった内容があるものです。ごくわかりやすく説明しますと、表と裏です。表面と内容です。人で申すならば肉体と魂です。……今地球上の科学者たちが捕らえている光とは、可視界以外のどの光線にせよ、いずれも表の面、つまり現われた波動のみを捕らえて、光線として波動として取扱っている」(p.144) とのことである。宇宙に存在する万物は波動でできており、一なる根源から発せられる光が+と-の形に変化し、分かれたその-は+と-に、分かれたその+は-と+に、このように分離と結合を繰り返す内に、いま私たちの眼前に展開されている、見える聞こえる触れるもの全てが創られたという。

「無限の広さを持つ大宇宙は一なる根源を中心として、縦横無尽に無数の波動が交叉に交叉を重ね、いろいろな形や個性を創っております。……その中で私たち人間ほど、広い自由と高い叡智とが与えられているものはありません。それは大宇宙を創られている神々様の御心を現わそうとして、お創りになったのが私達人間であったからです。」(p.164)

なお、宇宙科学の根本は数学であると言われるが、その数学の根本は何と「色」である。膨大な数に上る多種多様な波動を識別するのに必要な数学は、数字や記号を用いない。数学嫌いには朗報である。「地球上での数字に代わるものを、私たちは色でこれを識別致します。……私たちは色の区分、連帯、結合、進行等の変化によって、一見して皆その内容を知る」(p.147) のだという。「宇宙科学の根本は波動の分離・結合・交叉等において起こる諸現象の中から、必要な波動のみを抽出して利用するのであります。」(p.161)

以上のような説明を受けて、著者は改めて宇宙の神秘に驚愕するのであるが、次に場面は月面の基地へと転換する。月の基地には噴火口(円形の皿)のような円盤到着場があり、自走路が縦横に走っている。自走路とは、自走板の上に人なり物を置くと、その重力に正比例して電磁波が働き、一定方向に流れる如くに移動するものである。現在、地球上では車の自動運転が試行されているが、月では既に自走路があつて、ベルトコンベアのように

路自体が動くのである。ただ、ここで一つ念頭に置いておくべきは、村田先生が見聞している月が、霊体で感知された月に限定されているのか、それとも肉体の波動帯域にも及ぶものなのかが、定かではないということである。

夜空にぽっかり浮かぶお月さまは、私たちには親近感を覚えるもので、地球との関係も潮の干満などの現象によって知られているが、そこには円盤や母船の基地があるという。UFO 情報については、人々のパニックを恐れて、NASA（米国航空宇宙局）が隠蔽してきたことは、周知の事実である。ぼちぼち事の真相を受け入れるべき時機が来たようである。

地球上に私たちが生を享けて生活を営んでいること、つまりこの実存には、様々な制約が付き纏うが、「時間」と「空間」は、その代表であろう。出来事の情報を知らせるには、いつ、どこで、起きたことかが重要である。さて、その時間であるが、分かっているようでいながら、実はよく分かっていないものの典型である。時間とはいったい何か。宇宙人から見れば、時間は波動の世界における縦と横との基幹線を示すものであり、横に当たる時間の規定がないと、縦の波動を規定できない。縦の波動（意識波動）と横の波動（物質波動）が交叉することで、星々の世界や人々の世界が開かれるのであるが、時間は縦の波動が横の波動へ転換・転調する際の基点になるものであるから、宇宙の森羅万象は、時間を得て初めて固有の世界を持ちうると言いうる。

「宇宙科学は時間と波動の十字の交叉する所から、その星々その世界において出発点となりましょう。」一なる大神様との距離がどれほどかが決定的に重要となる。「その星々における波動に、つまり遠近に相対して、各々の時間があります。その波動と時間が十字に交叉して、天体上の地位、天命となって、無限の運行進化へと辿ってゆく」（p.190）のである。天位に従って星々にはそれぞれ固有の時間があり、因みに月の基地での時間は、地球の時間の二分の一のことである。

また、次のようにも言われる。「時間とは内容を表現する質と量のことです。質量の相等しきところから基準単位が生まれます。時間と空間はもともと一なる所から発しています。一なるところ、それはその星の波動、無数の波動の周波数の持つ最大公約数が一なるところとなります。縦横十字に交差した所が空、空なる処がその星の科学の出発点となります。空なる十字交差の一点を基準として、内に現われたのがその星の時間です。外に現われたのがその星の空間です。大宇宙の中心は時空一つに溶け合って輝きます。」（p.261）

時間と空間はもともと一つであって、特定の星に固有の波動の、いわばゼロポイント・フィールド（つまり完全調和の真空場）が自発的に破れて、内なる時間（意識界・内界）と外なる空間（知覚に開かれた物質界・外界）に分立する。「時間とは内容を表現する質と量のこと」とは、時間には内容（意識内容、経験内容）の質の違いと量の違いがあるのである。時間の量が少なくとも高密度の質の経験であれば、時間の量が多くて低密度の質の経験を凌駕するわけである。分かりやすく言えば、時間には意識（経験）密度の差というものがあり、それぞれの星の固有振動数（最大公約数）が基本となって、星の住人が共同主観的に共有する時空間が規定されるのである。人類の進化・霊化が進むにつれて、この

時間と空間は短縮されるようである。

宇宙船航行の秘密については、次のように語られる。大は島宇宙から小は原子に至るまで、一なる中心に向かって回転運動を休みなく続けている。一つの中心核のまわりを、幾重にも渦状になって或る運動が繰り返り広げられている。この円輪波は、陰陽高低となり渦状となって大宇宙の中に流れ込んでいる。この状態を波動帯と呼んでいる。円盤も母船も、この波動帯の中に入ると、その波動帯の持つエネルギーと同じものとなる。(p.244)

「大宇宙には無限数に近い振幅の異なった波動が、その振幅に相応した運動（拡大運動）を繰り返してこの波動帯の中に、円盤や母船を入れるのですが……それは円盤や母船の持つ電磁波をその波動帯の持つ振幅と同じ速さに転換すると、その波動帯の持つ本質的な運動、つまりその波動帯の持つ速度と同じ速さとなって航行するものであります。これは地球上で気球を掲げて、気流に乗せて遠くへ飛ばしたのと同じ理論です。」(p.253)

本書の概要紹介は、正直に申せば、たいへん厄介な仕事である。というのも、本書で扱う事柄自体が、常識的な見方からは相当隔たったものであるから、その認識のズレを指摘しながら、同時にズレを克服すべき方向性をも示す必要があるからである。また、ここで取り上げた事柄は、本書の内容の一端にすぎないことを、再び申し添えておきたい。

なお本書の続編として、**村田正雄『宇宙人と地球の未来』**(白光真宏会出版局、1988年)が出版されている。空飛ぶ円盤の飛行原理を再び詳述するとともに、金星人の生活状況や街の様子が具体的に描かれている。金星の社会が七を単位とした倍数で構成されていること、地上と地下と空の交通機関、湖の都市ラース、科学都市リマ、教育都市シマ、森の街ササリー、三次元より高次元に変える方法である祈りの場に智慧も力も自然に流れて来ること、金星の天地が実は私たちの心の中に存在すること等々、興味深い話が展開されるのだが、紙幅の関係上、詳細な紹介は割愛させていただきたい。金星は、地球に先駆けて一足早く進化した兄星として今後の地球の進化に深く関わっているとのことである。



以上、本書の内容のごく一部に焦点を絞って、多少の説明や解釈を交えながら概要紹介を試みた。以下は、本書に対する個人的な随想である。宇宙人の現存と超科学の出現を前提としたものであることは、断るまでもない。

本書解読のキーワードとして取り上げた「宇宙人」と「超科学」の観点から、上述した事柄を整理してみると、一方の「宇宙人」と対照をなすのは「地球人」であり、他方の「超科学」の反対項は「物質科学」である。「宇宙人－地球人」の二項は、人間観に関わるものと見なせば、人の存在境位がどれほどか深いか、人の存在振幅がどれほど広がりが問われることとなり、**実存と存在**の関係を探究するような問題地平へと開かれ出る。また、「超科学－物質科学」の二項の方は、科学観（より広い意味では学問観）に関わるものと見れば、

宇宙万象を捉える認識枠組や準拠枠が問われることになり、物質と意識の関係を究明するような問題領域へと通じてゆく。思い切って単純化すれば、前者は人間の存在論的問題、後者は宇宙の認識論的問題に関わると言えるだろう。

「宇宙人－地球人」の二項から浮かび上がる実存と存在の関係であるが、この場合に、実存はここでいま生きている事実、すなわち人間の現実存在 (existence) を指すのに対して、存在は人間の本質存在 (essence) を指す。実存は現実的な人間の様態、存在は本来的な人間の本質である。人間の実存様態は、有限性をもたらす幾つもの制約条件の下で成立している。この実存の制約条件として直ちに思いつくのは、時間と空間と人間関係の三つである。時間と空間は「時空間」と包括的に呼ばれており、人と人との間柄としての人間関係は「人間」と呼ばれうるから、それら三者を併せて「時空人間」と総称することができる。いまの連続が「時間」、ここでの連続が「空間」、その時空間が連続する特殊な場の開けを生きている人と人の関係が「人間」である。地球の天位に基づいて被った宇宙論的時空間の場の制約の他に、時間的制約は、人生が誕生から死亡までの間に限局されており、たいてい人生の目的や課題は死によって未完結・未達成に終ることを余儀なくされる。この時間的制約は、意識が過去を保持し想起しながら未来を予期する現在の持続であること、つまり意識が構成する内界の有り様を深く規定している。また、空間的制約は、肉体を纏い、そこからの知覚の開けが有限で遠近法的世界 (外界) であるという仕方で被っている。意識の内界と外界 (世界) の境界地帯に肉体が現存するのであるが、事実上は自分の境界線は肉体の皮膚にあると決め込んでいる。そのような時空間的制約以外に、人間的制約もある。自己と他者が切り結ぶ人間関係において改めて浮上するのは、自己は他者ではなく、他者は自己ではないという基本的な事実であるが、自己も他者も同一の根源に由来することに意識が目覚めるとき、自他の不一不二性が顕わとなる。即ち、「独りでもみんなと一緒に」「みんなと一緒にでも独り」、これが人の存在論的な基礎構造である。自己も他者も、それぞれ唯一無二の独自の存在として徹底的に独りである限りにおいて、自己以外に自己はない。しかし、その自己が由来した根源へと眼を転ずれば、他者も根源を同じくすることが覚知され、自他は等根源的な存在であることが明瞭となる。こうして、独自の自己と独自の他者は不一不二であり、徹底的に異なるもの (不一) でありながら、しかし完全に異なるものでもない (不二)。自他の関係は、いわば不連続の連続である。

ところで、上述したような「実存」は、それ単独では存立できず、自らを存立可能ならしめる存在根拠が不可欠である。それゆえ、実存の存在論的探究は、実存とその存在根拠をなすもの (ここでは「存在」と呼ぶ) の双方を同時に視野に収めない限り、原理的に決着はつかない。従来の人間観は、人を「実存」に限局するとともに、人の存在根拠を神仏 (超越者) に仰ぐのが一般的であった。この思考傾向は、相当根強いものがあるから、そこから抜け出すのは至難の業である。この種の人間観では、人は神仏ではありえず、神仏も人ではありえない。それゆえ、「実存と存在」の関係は、「人と神仏」の関係となる。と

ころが、人の存在境位が深まり、人の存在振幅が拓がるとき、実存から存在までを人と呼ぶ可能性が開かれる。つまり、「人」は自分の内に存在根拠を有する「**靈止**」となる。存在論的には、存在の方が実存に先行するから、より正確には、存在から実存までが人（＝**靈止**）であり、**靈止**は**靈**（神仏）を本有しているのである。つまり、人は神仏と本質を同じくするものであって、異なるのは存在境位の深浅や存在振幅の広狭である。

こうして、「実存と存在」の関係に対する考察から、(1)人の存在振幅に関わる見方としての「**人性三分説**」への刷新が求められ、(2)人の存在境位に関わる見方としての「人（の本体）は神仏である」ことの自覚が呼び起こされることになる。人の存在振幅は、一元論（唯心論や唯物論）でも、心身二元論でもなく、**靈心身**（あるいは**靈魂体**）三元論、つまり**人性三分説**（**trichotomy**）として捉え直される必要があるのである。人の存在構造は、神秘主義思想では五重や七重の重層構造をなすと考えられることが多いが、三以上の多数は、最終的には三に還元できるため、五重であれ七重であれ、三元論の考察で十分に間に合う。

「実存と存在」の関係は、人の存在振幅の観点からは、「心身と**靈**」の関係に重なってくる。また、人の存在境位は、人が神仏であることの自覚へと深まってゆく。人は**靈**（神仏）を本有する不死なるもの、無限の叡智、無限の慈愛、無限の意志を持つ存在である。このことに合点が行かないとすれば、それは「実存と存在」の関係において「人」を「実存」に限定しているためである。「人」の概念が、そもそも違っているのである。

では、もう一つの「超科学－物質科学」の二項は、物質と意識の関係に対する見方にもどのような変容をもたらすだろうか。従来の物質科学では、研究対象は専ら物質だけであり、研究者は物質界には何の影響も及ぼさずに、物質の構造と機能を調べる傍観者であった。しかし、超科学になると、研究対象は物質の他に意識が加わり、研究者は物質界に影響を与える**認識主観・行為主体**である。つまり、超科学は意識を科学に取り込むのであるが、それは対象への意識作用を考慮すること（主体と対象の相互作用）、および意識そのものを対象とすること（対象領域の拡大）を意味している。問題は、物質と意識の関係をどのように捉えるかである。(1)物質と意識が鋭い二元的対立の関係にあると見るとき、両者は同一座標で互いに逆方向に進むものと解することができる。両者が衝突し合うのは不可避である。この深刻な二元的対立を宥和させるためには、両者を媒介するもの、たとえば「**形**」（図形や象徴など）によって繋ぐ他はない。「形」が物質と意識の間に入って、両者を繋ぎ留めるわけである。他方、(2)意識と物質が鋭い二元的対立ではなく、多少なりとも緩やかな対立関係にあると見れば、たとえば意識の垂直軸と物質の水平軸が直角に交叉するような関係にあると解することができる。意識は垂直軸を異次元間にわたって次元変換（上昇や下降）し、物質は同次元の水平軸で疎密様々に様態変化（相転移）をする。この垂直軸に沿った意識ベクトルと水平軸に沿った物質ベクトルとの和を「**生命体**（生物）」と見ることができるだろう。こうした意識と物質の双方を貫いて統一するものを説明する原理は、「**数**」に求められるかもしれない。その「数」は、デジタル（不連続的変化）なのか、そ

れともアナログ（連続的変化）なのか。「色」は「数」の象徴的表現だろうか。「数」（振動数）が「形」を創り出すことは、クラドニの音の図形などからも知られている事実である。

単なる随想がこれ以上長くなると、誰も読んでくれない恐れもあるが、最後に超宗教と超科学について少しだけ付け加えておきたい。以前に何度か、近未来に宗教は超宗教へ変容し、科学は超科学へ変容することによって、宗教（霊性）と科学（物質）が一つに収斂する、という主旨のことを書いたことがある。一般に、教祖と教義（と儀礼）と信者の三つが揃えば、（創唱）宗教と見なすことができるが、宗教が超宗教へ変容するとは、教祖と信者の間に想定されていた上下関係・優劣関係が解消されて、両者が等根源的な存在であることを自覚すること、言い換えれば、信者がもはや救われる側ではなく、救う側へと立場を変えることを含むはずである。こうした存在境位の深まりは、不死（永遠）を覚知した「霊性の自覚」の深まりでもあり、そのような自己と他者が交わる世界が、神の国、仏国土などと称されてきたのである。要するに、その社会のごく普通の構成員（落語で言えば、熊さん、八つぁん、おかみさん）が仏陀やキリストやマリアなのであるから、神人とか、何とか仏とか、何とかの御子と呼ばれて然るべきであろう。「霊性の自覚」は、無限の叡智、無限の慈愛、無限の意志を自らが関与する世界に開頭して、固有の調和宇宙を創造することに繋がることであろう。科学が超科学へ変容することは、既に上で触れたが、管見では、物質科学のその「物質」が実は「意識」でもあったことに気づいて、慌てふためく喧騒の中で、真摯な科学者がその「意識－物質」の仕組みを理論的に解明すると予想される。物質は意識である限り、それは生きた物体、むしろ第二の身体と言うべきかもしれない。常識的な意味での身体が「小身体」（私の身体）だとすれば、フランスの哲学者ベルクソンが示唆したように、知覚に広がる物質界や自然界は「大身体」である。自分の分身である物質に対して、意識はどのような調和した関係を築くであろうか。今夜の夢の中で、その秘密の機微をそっと教えてもらいたいものである。

宗教の超宗教への変容と、科学の超科学へ変容、この二つの出来事は相互に連動し合い、一方は他方へと誘導し、他方は一方を喚起することになる。こうした出来事の連動を通して、超宗教と超科学は一つに統合される。というのも、超宗教へと深まる方向と超科学へと進む方向が、最終的には大宇宙の根源（大宇宙の中心）へ収斂すると直観されるからである。より正確には、そこへ向かって上昇する運動は、同時にそこを起点に降りてくる運動であり、むしろ大宇宙の根源からこそ、超宗教も超科学も出現しうるのだと言うべきであろう。保江邦夫氏の「完全調和の真空（神）」仮説が、改めて想起されるのである。

（2020/02/24 棚次正和）